

沖代地区条里跡 59 次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沖代地区条里跡 59 次調査
集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023
中津市教育委員会

2023
中津市教育委員会

序

沖代地区に広がる条里遺構は、数少ない古代の息吹を感じることでできる景観です。しかし残念ながら、昨今の開発はこの景観を徐々に蝕んできており、いまや住宅地がまさに条里を蚕食し尽くさんばかりの状態になっております。今回の調査も、そのような一角で行われました。

今回の条里水田の発掘調査では、条里の起源に迫る成果を得ることはできませんでしたが、広大な沖代平野が水田化する過程の一端を明らかにできました。この成果が今後の中津市域の歴史解明に寄与することになれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました中尾光生様をはじめ、調査に関わって下さいました方々に対し衷心より感謝申し上げます。

令和5年3月31日

中津市教育委員会
教育長 栗田 英代

例 言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が令和4（2022）年度に実施した沖代地区条里跡59次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は株式会社中尾工務店（代表取締役中尾光生氏）の委託を受けた中津市教育委員会が行い、小柳和宏（中津市歴史博物館専門員）が担当した。
3. 調査費、および報告書作成費は全額委託者が負担した。
4. 出土遺物の整理作業は、調査に引き続き令和4年度に実施した。
5. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は整理作業員が行い、旧和田公民館にて保管している。
6. 本書の執筆は第1章第1節を浦井直幸（中津市歴史博物館副主任研究員）、それ以外を小柳が行い、編集は小柳が行った。

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	調査体制	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査成果	6
第1節	調査概要	6
第2節	基本層序	6
第3節	遺構と遺物	7
第4章	総括	15
	遺物一覧表	
	写真図版	
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	調査区位置図	5
第3図	遺構配置図	6
第4図	基本層序模式図	6
第5図	1区遺構配置図	7
第6図	SD-1、SD-2平面・断面・土層図	8
第7図	SX-4平面・断面・土層図	9
第8図	2区遺構配置図	9
第9図	SD-5、SD-6平面図	9
第10図	1区南壁土層図	11
第11図	1区東壁、2区北壁土層図	12
第12図	出土遺物(1)	13
第13図	出土遺物(2)	14
第14図	沖代地区条里跡の小字	16

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	4
第2表	遺物観察表	17

写真図版目次

写真図版1	調査区全景 / 1区完掘状況
写真図版2	1区SD-2完掘 / 1区完掘全景 / 1区SD-1、SD-2、SX-4
写真図版3	1区SD-1、SD-2検出状況 / 1区SD-1、SD-2完掘状況 / 1区SD-2完掘状況
写真図版4	1区SD-2土層断面 / 1区SD-2木器出土状況 / 1区SX-4完掘状況
写真図版5	1区SX-4土層断面 / 1区土層断面 / 2区全景
写真図版6	2区検出状況 / 2区SD-5、SD-6検出状況 / 2区SD-5、SD-6完掘状況
写真図版7	出土遺物(1)
写真図版8	出土遺物(2)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

令和4年2月16日、中津市大字宮夫字九ノ坪282番1、283番1について、有限会社原はつり工業代表取締役原次人氏より文化財保護法93条第1項の規定による届出がなされた。届出地は沖代地区条里跡の中央やや東よりの地点にあたる。計画地に2棟の集合住宅を建設するものであり、基礎下に鋼管杭を打設する工法であった。

令和4年4月18日、計4本の試掘溝を設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、調査区東側に設定したトレンチから水田遺構が検出され、中世の瓦器や土師器などが出土した。

この結果を受け、中津市教育委員会は遺跡保護のため造成工事を担当する株式会社中尾工務店と工法変更の協議を行ったが、変更は不可避との結論に至り、遺構が確認された範囲約240mについて本調査の対象とすることとなった。

第2節 調査の経過

令和4年5月16日	本調査開始、重機による表土はぎ
5月17日	遺構検出作業、検出写真撮影
5月18日	作業員による掘り下げ開始
5月27日	土層図作成
5月30日	1区溝完掘、写真撮影
6月2日	1区の谷の落ち込み部分掘り下げ
6月3日	2区溝完掘、写真撮影
6月7日	完掘写真撮影
6月9日	調査終了

第3節 調査体制

中津市教育委員会	教育長	栗田 英代
〃	教育次長	黒永 俊弘
〃	社会教育課長	瀬戸口千佳
〃	〃 管理係主幹	速水 誠
〃	歴史博物館 館長	高崎 章子
〃	〃 副館長・文化財係主幹	花崎 徹
〃	〃 専門員	小柳 和宏（調査担当）

発掘調査は下記の皆さんの協力による。（五十音順、敬称略）

有馬勝彦、甲斐嘉夫、加来晴美、祐成本文、寺川数徳、福成誠一、本田廣和、三宅繁士、宮津しのぶ、吉崎睦夫

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県と大分県の県境にそびえる英彦山に源を発する山国川は、耶馬溪の峡谷を縫うように北流し、三光佐知で一度大きく氾濫原を形成するが、行く手を下毛原と呼ばれる洪積台地の段丘崖に遮られ、そこを回り込むと一気に扇状地を形成し、下流部には沖積地が形成される。この平野部を沖代平野と呼ぶ。最も南側の扇頂は標高18mで、沖積地河口部で標高2mなので、沖代平野は傾斜角0.2°ほどの緩やかな平地といえることができる。

沖代条里の大半を潤す井堰は「大井手堰（通称「三口井堰」）」である。「三口」とは取水口が三カ所に分かれていることからそう呼ばれており、そこから「東幹線」「中幹線」「西幹線」と呼ぶ3本の基幹水路が伸び、勅使街道（現在の県道万田四日市線）より北側の条里水田を潤しているのである。今回の調査箇所は勅使街道から北に1.5km離れた地点で、東幹線の支線による水掛かりの地となる。

第2節 歴史的環境

ここでは沖代平野と、そこを見下ろす下毛原台地について述べる。

調査地点は、宇佐宮への勅使が通ったとされる「勅使街道」と呼ばれる大宰府、豊前と豊後を結ぶ古代官道（現在の県道万田四日市線）から北に約1.5km入ったあたりで、沖代地区条里跡全体から見れば、中央からやや北東寄りのところになる。

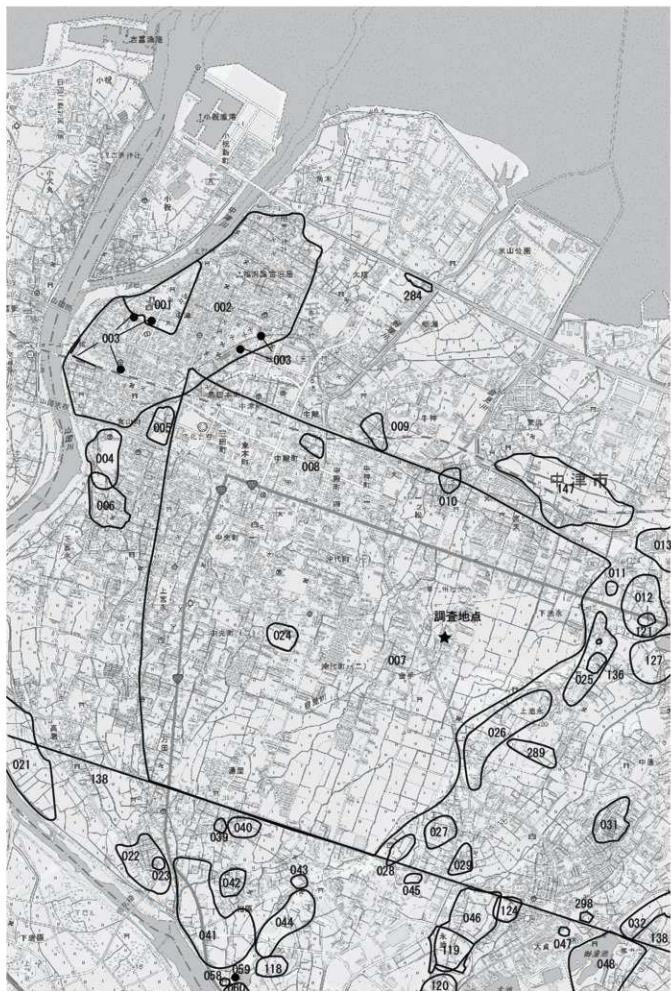
沖代平野の水田化は、少なくとも古墳時代後期にはかなりの面積でなされていたと考えられる。水田そのものの確認はまだなされていないが、水路と考えられる溝が多くの遺跡で確認されており、旧河道に伴う低湿地などで水田が営まれていた可能性が考えられる。微高地上では竪穴建物や掘立柱建物なども確認されており（湯屋・居屋敷地区、五堆地区）、微高地と低湿地がモザイク状に展開する沖代平野では、水田と小さな集落がセットになった景観がそこそこに見られたであろう。

現在、勅使街道以北には「条里」区画が部分的に残されている（南北の軸から東に19°振っている）が、明治段階の地籍図ではわずかに集落化した部分を除くと、ほぼ全面的に条里区画が展開していたことがわかる。この条里については、大分県立歴史博物館の『沖代条里の調査本編』（大分県立歴史博物館 2021）にまとめられている。それによると、「中津平野における条里開発は、奈良時代における平野東側の開発と、平安時代後期の大井手堰築造にともない進められた平野西側の再開発といった時代差を設定すべき」とされる。今回の調査箇所は、条里化が先行するとされる平野東部にあたるが、平野東部の開発に当たって利用されたとされる下毛原台地上の池掛かりの水は及ばない地点となる。

調査箇所の小字は「九ノ坪」（大字宮夫）と呼ばれ、さらに東南東には小字「一ノ坪」（大字上池永）もあることから、この「里」区画は南東角を「一ノ坪」とし、そこから西に進み折り返す、いわゆる「千鳥型」の配列を採っていたことがわかる（第14図参照）。調査箇所は「九ノ坪」の内、北端の2段分（長地型と考えた時）に相当する部分になる。明治時代の地籍図を見ると、比較的しっかりとした方一町の方形区画が残されていたのがわかる。この九ノ坪では、東西方向に地割がなされていた。

『倭名類聚抄』によると、古代の下毛部には7つの郷があり、その内沖代平野や下毛原台地に比定されるのは大家郷、麻生郷、小楠郷、野仲郷ということになる。今回の調査地点は小楠郷のエリアであろうか。

平安時代の後期には宇佐宮領十三郷荘の内の大家郷と野仲郷が沖代平野や下毛原に成立する。大井手堰の構築とも何らかの関係があったであろうことが推測される。中世後半期以降には、現在の集落に繋がるムラが成立したものと考えられる。それらは概ね勅使街道以南に形成されている。一方、下毛原台地上には、館群と考えられる方形の屋敷区画が残されており、「城屋敷」や「外屋敷」などの地名も残る。在り土豪の居館が広く展開していたものと考えられる。



第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代
001	中津城跡	中津市二ノ丁・三ノ丁	近世
002	中津城下町遺跡	中津市二ノ丁ほか	近世
003	中津城おかい山	中津市新魚町ほか	近世
004	高畑遺跡	中津市丸山町	縄文
005	豊田小学校校庭遺跡	中津市島田	弥生・古墳
006	宮永城跡	中津市下宮永	中世
007	沖代地区桑里跡	中津市中央町ほか	弥生・古墳・古代・中世・近世
008	中臣城跡	中津市中殿	中世
009	石神城跡	中津市牛神	中世
010	一ツ松城跡	中津市一ツ松	中世
011	鴻の巣城跡	中津市下池永	中世
012	龜山古墳	中津市下池永	古墳
013	合馬遺跡	中津市合馬	古墳・中世
021	高瀬遺跡	中津市高瀬	弥生・古墳
022	上万田遺跡	中津市万田	弥生・古墳・中世
023	河原田城跡	中津市万田字河原田	中世
024	沖代小学校校庭遺跡	中津市沖代町	弥生
025	下池永遺跡	中津市下池永	弥生・古墳・中世
026	上池永遺跡	中津市上池永	弥生・古墳
027	末広城跡	中津市永添	中世
028	西永添遺跡	中津市永添	弥生・古墳
029	梶屋遺跡	中津市永添	弥生・古墳
031	中原遺跡	中津市大悟法・上如水	中世・近世
032	大悟法地区桑里跡	中津市大悟法	古代・中世
039	福永城跡	中津市相原	中世
040	市場遺跡	中津市湯屋	古墳・中世
041	三口遺跡	中津市相原・湯屋	弥生・古墳・古代
042	相原廃寺	中津市相原	古代
043	法華寺城跡	中津市相原	中世
044	台遺跡	中津市相原	弥生・古墳
045	永添中園遺跡	中津市永添	弥生・古墳
046	八並城跡	中津市永添	中世
047	東ノ浦遺跡	中津市大貞	古墳
048	御澄池周辺遺跡	中津市大貞	古墳ほか
058	坂手前横穴墓群	中津市相原	古墳
059	鶴市神社裏山古墳	中津市相原	古墳
060	坂手隈城跡	中津市相原	古代・中世
118	相原山首遺跡	中津市相原	古墳・古代・中世
119	長者屋敷官衙遺跡	中津市永添	奈良・平安・中世
120	稲男田遺跡	中津市永添	
121	大道端遺跡	中津市下池永	中世
124	東浦遺跡	中津市永添	
127	石堂池遺跡	中津市下池永	古墳・中世
136	池永城跡	中津市上池永	中世
138	古代豊前遺跡	中津市伊藤田・福島ほか	古代
147	東浜遺跡	中津市東浜	古墳・中世
284	古濱東遺跡	中津市蛸瀬	古墳・近世
289	上池永矢苦遺跡	中津市大字上池永	中世
298	カジメン遺跡	中津市大字大貞	中世

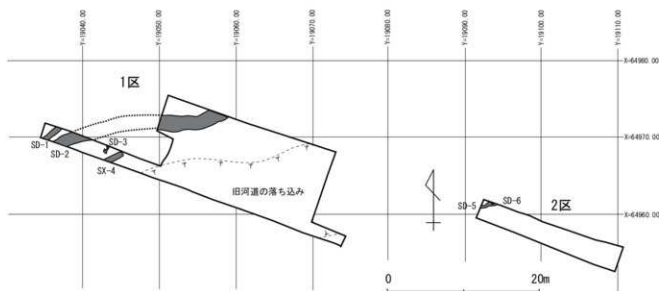


第2図 調査区位置図 (S=1/6,000)

第3章 調査成果

第1節 調査概要

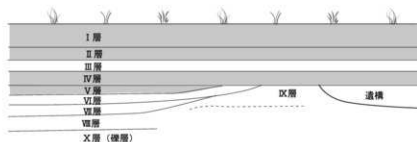
建物の建設工事によって掘削が予定された部分について重機による確認調査を行い、その結果遺構が確認された部分約331㎡について、本調査を実施した。重機によって現在の水田耕作土約20～30cm、さらに過去の水田耕作土約20cmを除去すると、遺構検出面となる黄褐色土が露出する部分と、灰褐色土が広がる部分とが確認できた。前者からは、溝などの遺構が確認できた。後者は旧河道の落ち込みを利用した水田層と考えられた。土壌中からは古代から中世初めの遺物が出土した。



第3図 遺構配置図 (S=1/500)

第2節 基本層序

1区においては、上層から近現代の水田層 (I層)、近世の水田層 (II層)、水田かどうか不明な黄色土 (III層)、遺構上面を広く覆う灰色土 (IV層) となり、遺構が確認できる面ではIV層の下に地山と考えられる黄白色粘質土 (VI層) があり、旧河道部ではIV層の下に、水田層と考えられる粘質の強いやや暗い灰色土 (V層) が認められた。さらに旧河道部では粘質の強い暗灰色土 (VII層) が落ち込み、その下には拳大の礫層が広がっていた。遺物が出土したのはV層までで、VI層以下では出土しなかった。



第4図 基本層序模式図

第3節 遺構と遺物

SD-1 (第6図)

1区の西端で検出された溝と考えられる遺構である。幅は約0.8m、深さは約0.3mである。土層断面(第6図)に見るように、第3層と第6層が砂層であり、流水があったことがわかる。複数回の掘り直しも行われている。出土遺物はなかったため、時期は不明である。

SD-2 (第6図)

1区の西端でS-1にほぼ並行して確認された溝で、調査区の北側でもその続きが確認された。それによると、緩やかなS字状のカーブを描いている。幅は1.9～2.2m、深さは0.4mである。土層断面(第6図)でわかるように、砂層が堆積しており、流水があったことがわかる。底面の標高は南側で5.9m、北側で5.8mなので、南西から北東に向けて流れていたことがわかる。

出土遺物は3点で、1と2は須恵器である。1は杯蓋で、口縁端部はまるく納まる。天井部の調整は不明である。2は短頸壺の口縁部で、短い口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。3は木製品で、両端に加工痕がある。図の右側の端部は、両面から削って先端を尖らせるのに対し、左側は刃部のように片側を削る。長さは12.8cm、幅は2.4cm、厚さは1.2cmである。

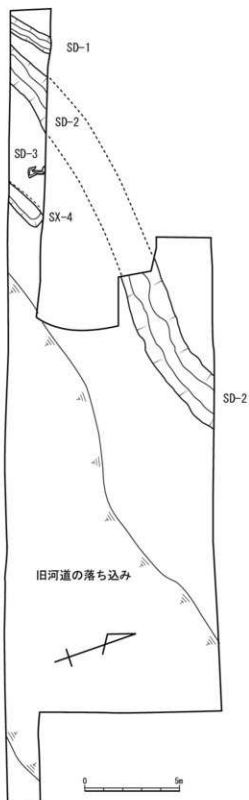
時期は、1と2の須恵器から、6世紀中頃から後半が想定できる。

SD-3

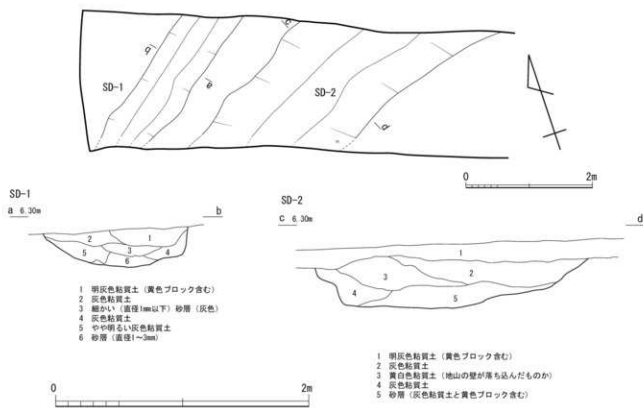
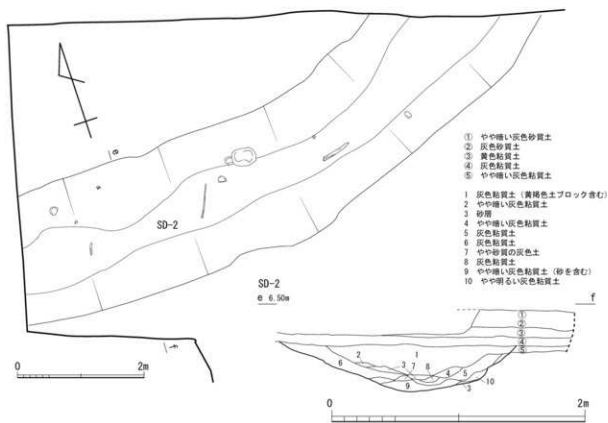
1区の西側で確認された遺構である。土層断面では浅く、床面に凹凸のある遺構として認められるが、平面的には遺構検出面を掘り過ぎたため、明確なプランを押しえられなかった。溝となる可能性が高い。第10図の土層断面図でわかるように、後述のSX-4を切っているが、出土遺物はなく、時期は不明である。

SX-4 (第7図)

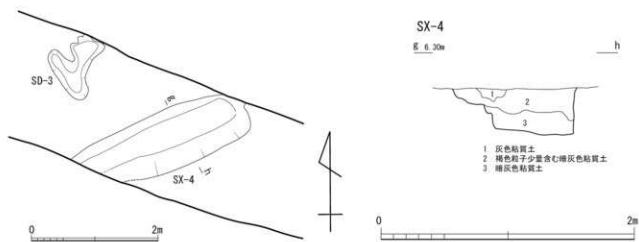
1区の西側で確認された遺構である。当初溝と考えられたが、北側で終息することがわかったため、水路などではない。幅は0.9m、深さは0.4mで、西側はオーバーハングしている。第10図の土層断面図でわかるように、SD-3に切られているが、出土遺物はなく、時期は不明である。



第5図 1区遺構配置図 (S=1/200)



第6図 SD-1、SD-2平面・断面・土層図 (S=1/60、S=1/30)



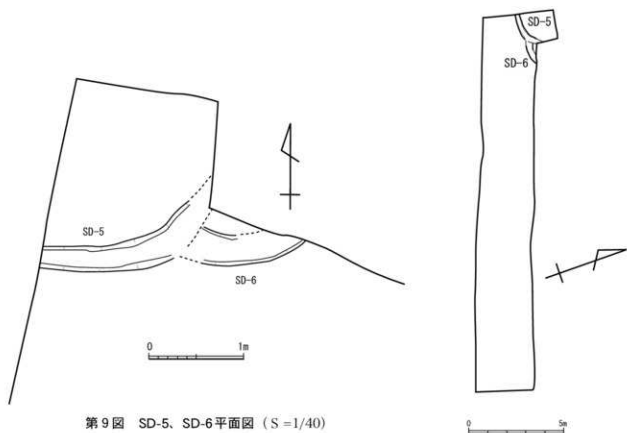
第7図 SX-4平面・断面・土層図 (S=1/60, S=1/30)

SD-5 (第9図)

2区の西端で確認された溝である。幅0.3m、深さは0.1mで、東側で屈曲している。出土遺物はなく、時期は不明である。

SD-6 (第9図)

区の西端で確認された溝である。幅0.3m、深さは0.1mで、やや湾曲して延びる。SD-5との切り合い関係は確認できなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。



第9図 SD-5、SD-6平面図 (S=1/40)

第8図 2区遺構配置図 (S=1/80)

1区の水田層

SD-1などの遺構が検出できる面、すなわちVI層上面より上部の土層は基本的に水田層である。上から近、現代の水田層（I層）、江戸時代の水田層（II層）、12世紀から13世紀前半の水田層（IV層）となる。さらに、旧河道の落ち込みの上部に堆積するV層は10世紀代の水田層である可能性がある。いずれも平面的な遺構（畦畔など）は確認できなかった。

出土遺物は第12図4から第13図54である。4から13は弥生土器と土師器。4は口縁端部がわずかに上方に伸びる弥生時代中期の甕、5は底部が突レンズ状になる弥生時代後期初頭の壺、6は弥生時代後期後半の複合口縁壺、7から13は甕の口縁部で、いずれも後期と考えられるが、一部は古墳時代以降に下るものも含まれるかもしれない。14は須恵器甕の胴部。15から20は古代瓦。17は2枚の粘土を重ね合わせている。18は外面格子タタキ、19は縄目タタキである。これらは相原廃寺の瓦であろう。

21から29は黒色土器A類で、いずれも比較的低い高台を持ち、体部は内湾しながら開く。器表面が観察できるものは、丁寧な磨きか施されている。器形からいずれも10世紀代のもと考えられる。30から32は土師器壺で黒色土器と同様の器形と考えられる。33は底部ヘラ切りの坏である。これらも10世紀代のものであろう。

34は玉緑の白磁碗、35は編連弁文の青磁碗である。36から42は瓦器である。高台が残っているものは、小さな高台か、痕跡程度の高台を持つ。43と44は糸切りの土師器坏、45は糸切りの土師器小皿である。46も土師器小皿である。47は土師質の羽釜か。48は東播系須恵器の鉢。49は土師質の鉢か。50は瓦質の鉢。34から49は12世紀から13世紀前半、50は15世紀から16世紀のものであろう。

51と52は近世の染付碗である。53と54は土鍾で、いずれも瓦質に近い焼きである。

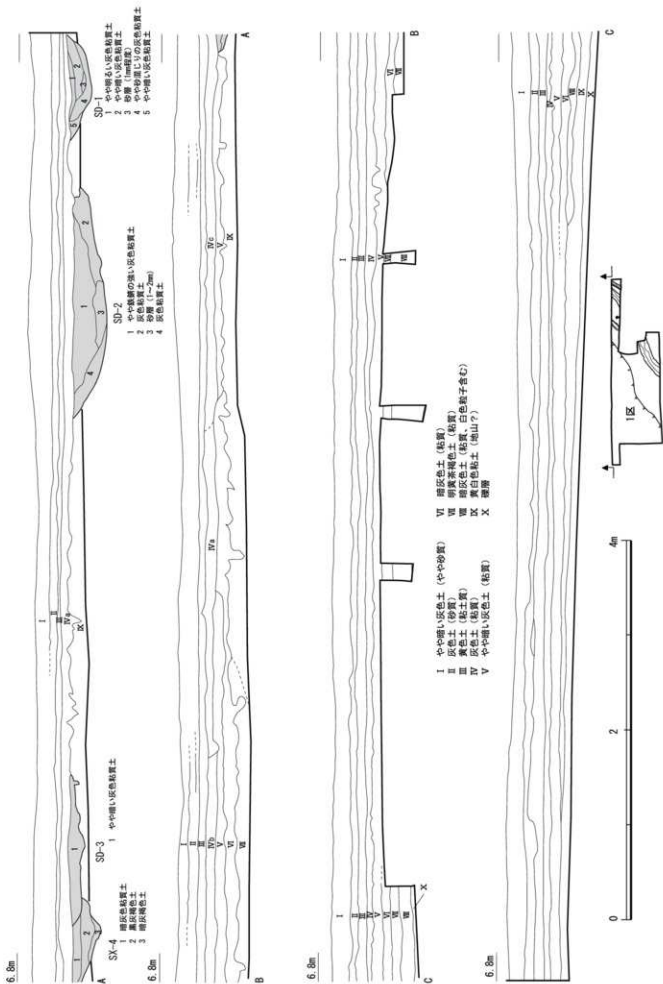
出土層位のわかるものでは、16、18の古代瓦、23と27の黒色土器壺、32土師器壺、43から45の土師器がIV層の出土である。51と52の近世磁器はII層の出土である。その他の資料で出土地点の標高がわかるものは、多くはIV層とV層の境である標高6.2mよりも上位、すなわちIV層の出土である可能性が高い。

V層に相当する標高のものは33のへら切りの土師器と5の弥生土器だけである。これらのことから、IV層が12世紀から13世紀前半のものであることは間違いないが、IV層には10世紀代の遺物も一定量含み、V層からの33の出土を勘案すれば、V層が10世紀の水田層であった可能性はあるものと考えられる。

2区の水田層

完全にI区のIV層に相当する土層が広がっていた。出土遺物は第13図55の土師器壺の口縁部である。これのみでは時期を決めかたないが、10世紀のものである可能性が高い。

また、SD-5を挟んで北側の拡張区ではIV層の下に黒色土が広がる（写真図版6）。この黒色土は、SD-5に伴う水田と考えられる。ただし、遺物が出土していないので時期の確定は難しい。IV層がI区と同様12世紀から13世紀前半だとすれば、それ以前ということになる。なお、この黒色土に相当する土層はI区では確認されていない。



第10図 1区南段土層図 (S=1/40)

6.80m



- I やや暗い灰色土 (やや砂質)
- II 灰色土 (粘質)
- III 黄褐色土 (粘土質)
- IV 灰色土 (粘質)
- V やや暗い灰色土 (粘質)
- VI 黄白色粘土 (地山?)
- Ⅶ 黄白色土 (粘質)
- Ⅷ 黄褐色粘砂土 (粘質)
- Ⅸ 黄褐色土 (粘質)
- X 礫層

1区東壁

6.80m



- ① やや暗い灰色土 (1区の上層)
- ② 灰色土 (1区の上層)
- ③ 黄褐色粘質土
- ④ 黄褐色粘質土
- ⑤ 黄褐色粘質土
- ⑥ やや暗い粘砂土
- ⑦ 白色粘土 (1区のVI層)
- ⑧ 礫層 (1区のX層)

黄褐色土 (粘土質)

6.80m

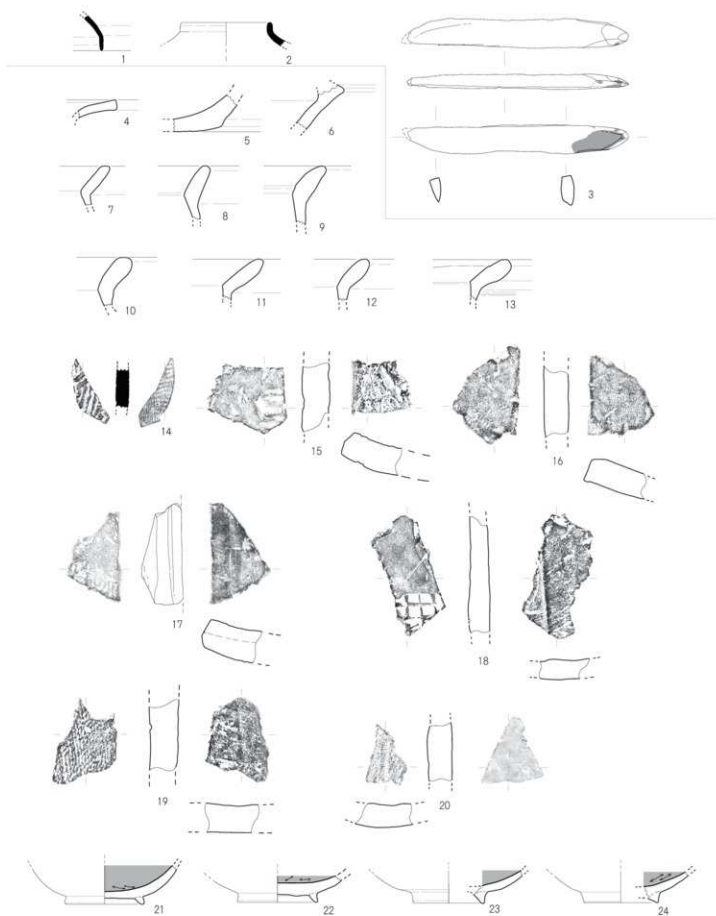
6.80m



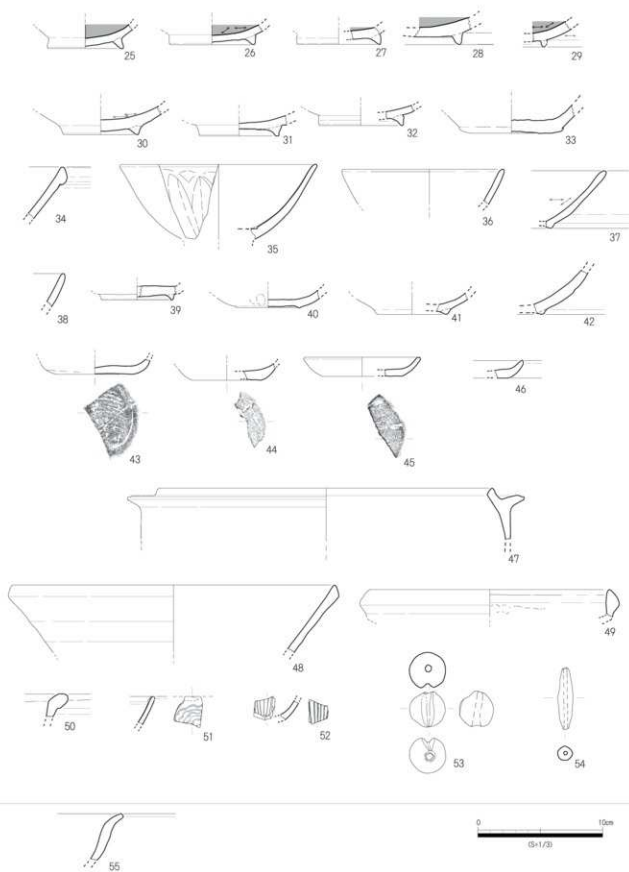
2区北壁



第11図 1区東壁、2区北壁土層図 (S=1/40)



第12図 出土遺物(1) (S=1/3)



第13図 出土遺物(2) (S=1/3)

第4章 総括

今回の調査箇所は、大字宮夫字九ノ坪であった。沖代地区条里跡には「数字+坪」地名が4ヵ所残るが、そのうちの1ヶ所が今回の調査箇所である。至近には「一ノ坪」もあり、そこから始めて西に行き、北に折り返して九番目の坪が「九ノ坪」である。つまり、沖代地区条里跡は、南東角部から西に向かい、北に折り返す千鳥式坪並ということになる。明治段階の地籍図を見ると、今回の開発予定地は、幅約10m、長さ約100mの長い水田が2枚並んでいたことが確認できる（調査前には1枚になっていた）。つまり、坪は長地型に地割されていたと考えられる。周辺の状況を地籍図で確認してみても、明確に半折型と認められる地割は無いので、沖代地区条里跡は長地型だったと考えても良いであろう。

今回の調査によって確認された遺構は、概ね西南西から東南東方向に軸が認められる。それは、調査区内で確認された「旧河道の落ち込み」の方向に一致している。水路と考えられるSD-3が古墳時代後期のものであれば、条里施工前に旧河道に規制された水田が存在したことになる。残念ながら今回の調査区内では確認できなかったが、旧河道を利用した水田が古墳時代後期には営まれていたことが想定できる。沖代地区条里跡の過去の調査からも、同様の所見が得られている（中津市教委2022など）。

大分県立歴史博物館は平成28年度から5年間、「沖代条里の調査」を行った（大分県博2021）。その成果に依りながら、「九ノ坪」あたりの開発史を一瞥しておきたい。

沖代地区条里の基幹水路は「大井手堰（三口井堰）」から取水する3本（西幹線、中幹線、東幹線）の水路の内、中幹線と東幹線の2本で、勅使街道以北の条里水田に配水する。中幹線はさらに第1から第3の3本に枝分かれし、それぞれがまた支線を伸ばしている。東幹線と下毛原の間はやや低く（旧河道）、そこには湧水と下毛原からの谷水（現在は江戸前期に開削された荒瀬井路の水が被る）がかかるとは思われるが、ここに「九ノ坪」という地名（今回の調査地の九ノ坪とは別）が残ることから、ここが先行して開発された可能性を指摘している。その後、調査地のある旧河道に挟まれた微高地に水を運送するために東幹線が開削されたという順序を想定している。そして、東幹線が白鳳寺院とされる相原庵寺の前を通ることから、開削は奈良時代に遡ると想定する。これらの想定が正しいとすると、今回の調査地である「九ノ坪」は奈良時代には条里区画に取り込まれていたことになる。

次に、今回の調査で検出された遺構、遺物に基づいて、この「九ノ坪」の開発史を考えてみたい。最も古く遡る遺物は水田層と考えられるIV層、V層で出土した弥生土器であるが、周辺からの流れ込みであろう。次いで、水路と考えられる溝（SD-2）から6世紀中頃から後半の須恵器が出土している。この時期の水路であれば、周辺に古墳時代後期の水田が展開していたことになる。この沖代地区条里跡の過去の発掘調査でも、古墳時代後期の溝が確認されており（中津市教委2022ほか）、この時期に広範囲で旧河道などの低地帯において水田が営まれていたことが想定できる。

次いで、同じくIV層、V層から古代瓦が出土している。これらの瓦は7世紀末に創建されたとされる相原庵寺（東幹線の上流部にある）に由来するものであるが、同時期の遺物は他になく、瓦のみが出土している。何らかの選択が行われた上で、後述の10～13世紀にもたらされたものであろう。

次いで、同じくIV層、V層から10世紀代に位置付けられる一群の資料（黒色土器A類やへう切りの土師器）が出土している。これらから少なくとも下層のV層がこの時期の水田層と想定できる。さらに、IV層の上部からは12世紀後半から13世紀前半の一群（白磁碗IV1a、龍泉窯青磁碗15b、瓦器など）が出土しており、IV層をこの時期の水田層と想定できる。このIV層は旧河道部分を越えて調査区全体に広がるので、12世紀から13世紀が、沖代平野の開発として一つの画期であったことがわかる。この状況も沖代地区条里跡の過去の調査で確認されている。つまり、II層下部から17世紀代の磁器碗が出土しているの、II層は江戸時代の水田層と考えられる。

このように、今回の調査地点では、①旧河道に並行する古墳時代後期の水路、②埋没した旧河道部に作られた10世紀の水田層、③微高地に展開する12世紀から13世紀前半の水田層、④江戸期の水田層、⑤近現代の水田層、という変遷が確かめられた。一方で、想定された奈良時代の遺構、遺物は古代瓦以外まったく出土しなかった。このことを受けて、奈良時代の条里水田の存在を否定できるわけではないが、過去の沖代地区条里跡の調査でも奈良時代の遺物は少なく、当該期の水田層も確認されていないことからすると、この地区だけの問題ではない。調査手法の再検討も含めて、意識的に奈良時代の水田層の探索を行う必要がある。



第14図 沖代地区条里跡の小字 (S=1/15,000)

参考文献

中津市教育委員会 2022 『沖代地区条里跡55次調査』

大分県立歴史博物館 2021 『沖代条里の調査 本編』

第2表 遺物観察表

調査番号	出土遺構 (注記番号)	器種 (残存率)	法量(cm)		色調	胎土	焼成	成形	調整・技法	備考
			①	②						
1	1区SD-2	須恵器・環蓋 小片	①(2.8)		外:灰白色 内:灰色	0.5mm以下の黒色粒子中量	良好	ロクロ	外:ヘラケズリのち粗いナデ 内:ナデ	
2	1区SD-2	須恵器・蓋 小片	①(1.9) ②(7.0)		灰白色	1mm以下の黒色粒子中量	良好	ロクロ	ヨコナデ/ナデ	
3	1区SD-2.2	木製品	長さ12.8 厚さ1.2	幅2.4						コゲあり
4	1区No23	弥生土器・甕 小片	①(1.4)		外:浅黄褐色 内:灰黄色	2mm以下の角閃石中量・1ミリ以下の 石英中量・3ミリ以下の白色粒子少量	良好		ナデか?	
5	1区No97	弥生土器・甕 小片	①(3.0)		外:淡赤褐色 内:黒褐色・灰白色	2mm以下の角閃石少量・石英中量	良好		摩耗により不明	
6	1区No102	弥生土器・蓋 小片	①(3.6)		外:淡黄褐色 内:灰白色	2mm以下の角閃石中量・石英少量	良好		摩耗により不明	
7	1区水田層 上面	土師器・甕 小片	①(3.1)		外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の角閃石・石英中量	良好		ヨコナデ	
8	1区①	土師器・甕 小片	①(4.3)		黒褐色～にぶい黄褐色	0.5mm以下の角閃石中量・石英 多量	良好		ナデ	
9	1区西証張 II・田層	土師器・甕 小片	①(4.7)		にぶい黄褐色	2mm以下の角閃石中量・1ミリ 以下の石英少量	良好		ヨコナデ	
10	1区No39	土師器・甕 小片	①(4.1)		外:灰黄褐色 内:明褐色	2mm以下の角閃石中量・石英多 量・1mm以下の白色粒子微量	良好	ロクロ	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ/ナデ	
11	1区No38	土師器・甕 小片	①(3.3)		黄褐色	2mm以下の角閃石・石英少量・1 mm以下の白色粒子中量	良好	ロクロ	ナデ	
12	1区No55	土師器・甕 小片	①(3.3)		外:灰黄褐色 内:黒色	3mm以下の角閃石・石英少量・赤 色粒子少量・白色粒子微量	良好		ナデ	
13	1区No92	土師器・甕 小片	①(3.3)		にぶい黄褐色	0.5mm以下の角閃石・石英中量	良好	ロクロ	外:ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	
14	1区No41	須恵器・甕 小片	①(5.4)		外:灰白色 内:明赤灰色	0.5mm以下の白色粒子少量	良好		外:タタキのちハケ 内:タタキ	
15	1区No53	古代瓦 小片	長さ(5.5) 厚さ2.2	幅(6.2)	浅黄褐色	白色粒子少量	良好		タタキ 布目	
16	1区水田層 上面	古代瓦 小片	長さ(8.0) 厚さ2.2	幅(5.6)	灰白色～にぶい黄褐色	1mm以下の角閃石・石英少量	良好		布目	
17	1区No90	古代瓦 小片	長さ(7.6) 厚さ2.6	幅(4.9)	褐灰色	1mm以下の白色粒子少量・角閃 石・石英微量	良好		タタキ 布目	
18	1区水田層 上面	古代瓦 小片	長さ(9.9) 厚さ1.6	幅(6.1)	褐色～明褐色～灰白色	0.5mm以下の角閃石・石英微量	良好		タタキ 布目	
19	1区No84	古代瓦 小片	長さ(7.3) 厚さ2.3	幅(5.5)	外:明黄褐色 内:灰白色	0.5mm以下の角閃石・石英少量	良好		繻目タタキ 布目	
20	1区No17	古代瓦 小片	長さ(5.4) 厚さ1.9～2.1	幅(4.8)	にぶい黄褐色～黄褐色	良好 白色粒子	堅緻		布目	
21	1区No91	内黒土器・埴 底部1/2	①(3.1) ③(6.2)		外:灰白色 内:黒褐色	1mm以下の角閃石・石英中量・2 mm以下の赤色粒子少量	良好		外:不明/ナデ 内:ミガキ	高台貼付
22	1区No81	内黒土器・埴 底部	①(2.1) ③(6.4)		外:褐灰色～灰白色 内:黒色	0.5mm以下の角閃石少量・石英 多量・赤色粒子微量	良好	ロクロ	内:ミガキ	高台貼付
23	1区水田層 上面	内黒土器・埴 小片	①(2.6) ③(5.6)		外:灰黄色 内:黒褐色～褐灰色	3mm以下の角閃石少量・0.5mm以 下の石英中量	良好		外:不明 内:ミガキ?	高台貼付
24	1区No109	内黒土器・埴 小片	①(2.5) ③(5.8)		外:灰白色 内:褐灰色	1mm以下の角閃石・石英少量	良好		外:ナデ 内:ミガキ	高台貼付
25	1区水田層 検出面	内黒土器・埴 小片	①(1.9) ③(5.8)		外:明灰褐色 内:黒褐色	1mm以下の角閃石少量・石英中量	良好		外:ナデ? 内:ミガキ?	高台貼付

発掘 番号	出土遺構 (注記番号)	器種 (残存率)	法量 (cm)		色調	胎土	焼成	成形	調整・技法	備考
			①	②						
26	1区No45	内黒土器・碗 底部1/2	①(1.6)	③(6.8)	外:灰白色 内:褐灰色	1mm以下の角閃石少量・0.5mm 以下の石英多量	良好	ロクロ	外:ナテ 内:ミガキ	高台貼付
27	1区西拡張 IV層	内黒土器・碗 小片	①(1.4)	③(6.6)	外:灰白色 内:黒褐色	1mm以下の角閃石少量・石英多量	良好	ナテ		高台貼付
28	1区No75	内黒土器・碗 小片	①(2.2)		外:明黄褐色 内:褐灰色	1mm以下の角閃石・石英少量	良好	不明		高台貼付
29	1区No24	内黒土器・碗 小片	①(1.4)		外:灰白色 内:黒色	0.5mm以下の角閃石中量・1mm以 下の石英少量	良好	ロクロ	外:ミガキ/ナテ 内:ミガキ	高台貼付
30	1区No14	土師器・碗 小片	①(2.3)	③(6.0)	外:にぶい黄褐色 内:褐色	1mm以下の角閃石中量・0.5mm以 下の石英中量	良好	ロクロ	外:不明 内:ミガキ	高台貼付
31	1区一括	土師器・碗 小片	①(1.6)	③(6.0)	外:褐色~にぶい褐色 内:黄褐色~明黄褐色	1mm以下の角閃石少量・石英中量	良好	ナテ	外:ナテ 内:割落のため不明	高台貼付
32	1区西拡張 IV層	土師器・碗 小片	①(1.6)	③(6.6)	灰白色	1mm以下の角閃石・石英微量	良好	ナテ		高台貼付
33	1区No47	土師器・杯 底部1/2	①(2.3)	③(8.4)	外:灰黄褐色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英多量	良好	ロクロ	外:ナテ? 内:ナテ	底部へう 切り
34	1区No28	白磁・甕(VIa) 小片	①(4.1)		灰白色		良好	ロクロ		
35	1区No76	青磁・碗 小片	①(6.0)	②(15.6)	緑灰色		良好			片彫り蓮 井文
36	1区④	瓦器・碗 小片	①(2.8)	②(13.8)	黒色~灰白色	0.5mm以下の角閃石少量・石英 中量	良好		外:ヨコナテ/タテ方向ハケ目? 内:ヨコナテ	
37	1区No37	瓦器・碗 小片	①4.6		黒色・灰白色	0.5mm以下の角閃石・石英・白色 粒子中量	良好	ロクロ	外:ヘラケズリのちナテ/ナテ 内:ミガキ	高台貼付
38	1区No1	瓦器・碗 小片	①(2.4)		外:明黄褐色 内:暗褐色	0.5mm以下の角閃石微量・石英 少量	良好	不明		
39	1区No5	瓦器・碗 底部1/4	①(1.1)	③(5.6)	外:黒色 内:黒色・白色	1mm以下の角閃石少量	良好	ロクロ	外:ナテ 内:不明	高台貼付
40	1区④	瓦器・碗 小片	①(1.4)	③(5.0)	赤褐色~灰白色	1mm以下の角閃石少量・石英微量	良好	ナテ		外面にユ ビオサエ
41	1区No88	瓦器・碗 小片	①(1.8)	③(5.6)	黒色	0.5mm以下の角閃石・石英微量	良好		摩耗により不明	高台貼付
42	1区No71	瓦器・碗 小片	①(3.6)		淡褐色~黒褐色	0.5mm以下の角閃石・石英・1mm 以下の白色粒子少量	良好	ナテ	外:ナテ 内:平瀬なナテ	高台貼付
43	1区水田層 上面	瓦器・杯 小片	①(1.2)	③(6.2)	外:黄灰色~灰白色 内:明黄褐色	0.5mm以下の石英少量	良好	ロクロ	外:粗いナテ 内:ナテ	底部糸切 り
44	1区水田層 上面	土師器・杯 小片	①(1.3)	③(5.6)	灰白色	0.5mm以下の角閃石・石英微量	良好	ロクロ	ナテ	底部糸切 り
45	1区水田層 検出面	瓦器・皿 小片	①1.6	③(6.4)	灰色		良好		外:へら調整のちナテ 内:へらミガキか	底部糸切 り
46	1区西拡張 II・III層	土師器・小皿 1/4	①1.9		褐色	2mm以下の角閃石中量・石英多量	良好		摩耗により不明	
47	1区No59	土師質土器・蓋 小片	①(4.1)	②(26.6)	灰色~明黄褐色	1mm以下の角閃石・石英・白色粒 子多量・赤色粒子中量	良好	ナテ		
48	1区水田層 検出面	(中世東播磨系) 須恵器・鉢	①(5.4)	②(18.0)	褐灰色~灰白色	0.5mm以下の石英微量	良好	ロクロ	ヨコナテ	外面口縁部 に自然粘
49	1区水田層 上面	土師質・不明 小片	③(2.2)	②(19.2)	明褐色~にぶい褐色	0.5mm以下の石英多量	良好		ヨコナテ	
50	1区一括	瓦質土器・鉢 小片	①(1.8)		にぶい褐色	0.5mm以下の角閃石・石英少量	良好		外:ヨコナテ/へらによる調整 内:ヨコナテ/ナテ	
51	1区II層	近世磁器・染付 小片	①(2.3)		淡青色					
52	1区西拡張 II・III層	近世磁器・染付 小片	①(10.1)		薄青色		良好	ロクロ		
53	1区No52	土師(瓦質) ほぼ完形	長さ2.9 厚さ2.8	幅2.9	灰白色	1mm以下の角閃石・石英・白色粒 子多量	良好			
54	1区No67	土師(瓦質) 完形	長さ4.9 厚さ1.1	幅1.2	黒褐色~にぶい黄褐色	1mm以下の角閃石中量・0.5mm以 下の石英・白色粒子少量	良好			
55	2区灰色粘 土中	土師器・碗 小片	①(3.6)		外:にぶい黄褐色 内:明褐灰色	2mm以下の角閃石少量・石英中量	良好	ナテ		



調査区全景（東から）



1区完掘状況（東から）



1区 SD-2 完掘 (東から)



1区完掘全景 (左側の黒く見えるところが旧河道の最後の堆積層)



1区 SD-1、SD-2、SX-4 (左から)



1区 SD-1、SD-2 検出状況（西から）



1区 SD-1、SD-2 完掘状況（西から）



1区 SD-2 完掘状況（北から）



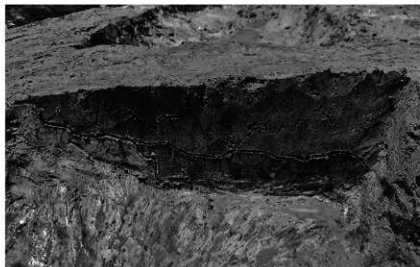
1区 SD-2 土層断面 (南から)



1区 SD-2 木器出土状況



1区 SX-4 完掘状況 (東から)



1区 SX-4 土層断面 (北から)



1区土層断面 (上から近現代の水田、近世の水田、無遺物層、
12～13世紀の水田、自然堆積層)



2区全景 (西から)



2区検出状況



2区 SD-5、SD-6 検出状況
(左側の黒い部分が一段低い水田、その水田に沿って溝が延びる)



2区 SD-5、SD-6 完掘状況 (西から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



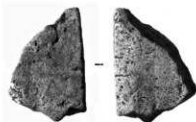
13



14



15



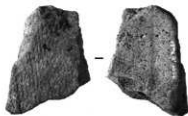
16



17



18



19



20



21



22



23



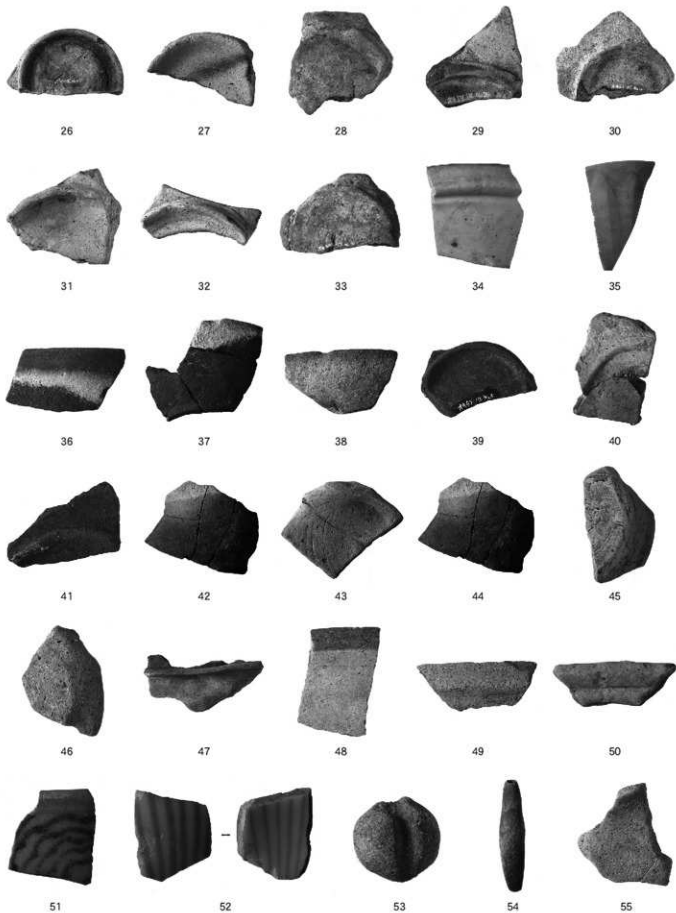
24



25

出土遺物(1)

写真図版 8



出土遺物2)

報 告 書 抄 録

書 名	おき だい ち く じょう り 跡 じ ちよう き 沖代地区条里跡 59 次 調査							
副 書 名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リーズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リーズ 番号	第117集							
編 集 者 名	小柳和宏、浦井直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	2023年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面 積	調査原因
沖代地区条里跡	中津市大字宮夫字九ノ坪232番1, 283番1	44203	203007	33° 35' 08"	131° 12' 20"	20220516 ～ 20220609	331㎡	集合住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖代地区条里跡	溝、水田	古墳・古代・中世	溝状遺構 水田層	黒色土器、土師器、陶磁器		—		
要 約	旧河道に沿う古墳時代後期の溝を検出、その上部に 10 世紀、12 ～ 13 世紀、近世、近現代の水田層が重なる。							

沖代地区条里跡59次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告書 第117集

令和5年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 藤川原田印刷社